「新女性」の愛と性、そして「恋愛至上主義」[1]

―有島武郎「石にひしがれた雑草」と廉想渉「除夜」を手掛かりとして―

丁　貴連

一、はじめに―恋愛イデオロギー

近代に入って「恋愛」が脱封建主義的命題として浮上した。なかでも日本では、「恋愛」は啓蒙性、つまり政治性を帯び、近代化に伴う形で現われた。このような政治性を含む「恋愛」は英語の「LOVE」を翻訳する過程の中で作られた造語である。[2] そもそも「古代日本人には「恋」はあっても恋愛はなかった。（中略）なぜなら「恋愛」は西ヨーロッパに発生した観念だから」[3]である。それは既存の「愛」「情」「恋」が家族的、宗教的観念に絡んでいたために「LOVE」の近代的含意、つまり個人と個人との自由な選択による「LOVE」の観念を表現しきれなかったからである。そこにキリスト教的な神聖さを加味させた「恋愛」が登場してきたのである。[4]

この「恋愛」という近代の産物は日本を経由して韓国にも伝わった。日本に留学した韓国近代文学の父と言われる李光洙の「自由恋愛」啓蒙運動をはじめ、日本留学派の廉想渉、金東仁、田榮澤など、韓国近代文学者によって「新」を内包する魅力的なテーマとして扱われたのである。しかし、「恋愛」啓蒙期において李光洙が強調した「妹のように愛すること」[5]、つまりプラトニック・ラブは、一九二〇年代に入ると、性解放をかかげた「恋愛至上主義」に変貌し、結婚に結びつかない「恋愛」観が新たに形成されていくのであった。それは今まで社会の中心に君臨し続けてきた男性にとって代わり、この「恋愛」の主体となったのが近代的知識を身につけた「新女性」たちであったからだ。彼女たちは自分の人生を直接見つめようとしていた。「新女性」は「自由恋愛」の賛美と、それに伴い愛する男女が結ばれるという「恋愛」観を持っていた。封建時代における階級内婚、早婚、売春婦、寡婦の再

婚禁止など、伝統社会の結婚観が支配的であった時代に、「新女性」たちは従来の価値観と正面からぶつかったのである。こうした状況下で一九二〇年代の韓国では空前の「恋愛」ブームが巻き起こったのである。

本稿では、前述した「恋愛」の歴史的な変遷を踏まえ、日本の「恋愛」観念が韓国的「恋愛」観念へと変わっていく実情を、有島武郎の「石にひしがれた雑草」（一九一八）と廉想渉の「除夜」（一九二二）を手がかりとして明らかにする。と同時に、日本と韓国における「恋愛」観念と、その「恋愛」観における女性の描き方について比較考察を行いたい。

二、「除夜」の源泉としての「石にひしがれた雑草」

その一、「石にひしがれた雑草」とそのあらすじ

一九一七年、「自由恋愛」思想を背景に書かれた李光洙の「幼き友へ」が発表されたのを皮切りに、韓国では「自由恋愛」をモチーフにした小説が多く描かれるようになった。しかし、一九二〇年代に入ると、結婚を理想とした「自由恋愛」はもはや色あせ、女性自身が主体となって性解放を主張する「恋愛至上主義」に向かっていくのであった。まさしくその過程で書かれたのが廉想渉の「除夜」（『開闢』一九二二年二月～六月）である。

廉想渉は、一九一二年十五才で渡日し、麻布中学校を経て一九一八年京都府立第二中学校を卒業後、同年慶応大学予科に入学した。しかし、学費の調達が苦しくなり、京都や大阪、神戸、横浜などを転々とした末、一九二〇年、創刊されたばかりの『東亜日報』の政経部記者となって帰国した。わずか一年足らずで記者を辞めた廉想渉は、一九二一年、『標本室の青蛙』を以て華々しく文壇デビューを果たし、以後、韓国近代文学を代表する作家として文壇をリードした。留学中の廉想渉は、徳富蘆花や尾崎紅葉、夏目漱石、高山樗牛、二葉亭四迷訳のツルゲーネフなどを愛読するなど文学青年であった。帰国後も、取材で知り合った柳宗悦を通じて志賀直哉など白樺派作家と交流するなど、日本の文壇及び日本文学に深い関心を示していた。とりわけ有島武郎の作品に心酔[6]し、後に朝鮮近代文学史を塗り替える三部作「標本室の青蛙」（一九二一）「暗夜」（一九二二）「除夜」（一九二二）を書き上げている。この三部作に有島の「生まれ出づる悩み」

（一九一七）と「石にひしがれた雑草」（一九一八）が強い影響を与えていたのはよく知られた事実であるが、[7] 有島の影響を受けていたのは廉想渉だけではない。金東仁、田榮澤、朴錫胤、朴鐘和など、一九一〇年代に日本に留学していた文学者の間では「宣言」（一九一五）、「生まれ出づる悩み」（一九一七）、「平凡人の手紙」（一九一七）、「小さき者へ」（一九一八）、「死とその前後」（一九一七）、「カインの末裔」（一九一七）「石にひしがれた雑草」（一九一八）など、有島の代表的な作品が広く読まれていた。廉想渉ら韓国の文学者たちが『或る女』（一九一一～一九一三）『宣言』「石にひしがれた雑草」など、いわゆる自我に目覚め始めた女性の自立や自覚、自我の実現を扱った作品に深い関心を示し、その影響を強く受けていたことは注目に値する。金東仁の「心の浅き者よ」（一九一九「弱き者の悲しみ」（一九一九）、田榮澤の「運命」（一九二〇）、廉想渉の「除夜」（一九二二）「ひまわり」（一九二三）、李光洙の『再生』（一九二五）などは、いずれも自由恋愛を通して自我を実現しようとした女性たちの苦悩と挫折を描いた作品であるが、これらの作品に有島の『或る女』「石にひしがれた雑草」「宣言」などが深い影響を与えていた。中でも廉想渉の「除夜」は夫を裏切った妻が自分の過ちを自覚し、自殺する直前に夫に置手紙を書き残す点など、「石にひしがれた雑草」から多くのヒントを得ている。[8] そこで両作品の影響関係を分析するに先だって、まず「石にひしがれた雑草」について見ていく。

「石にひしがれた雑草」は中村白葉から聞いた実話をもとに描かれた作品である。有島はそのことを初出稿の末尾に次のように明かしている。

> 「一人の男がいてある女と婚約していた。所がその男が洋行中女は他の男と恋に陥つた。最初の男が洋行から帰ると、女はすべてを白状した。男は慇懃にそれを許し結婚した。而して心に不断の嫉妬を潜みながら、その女に親切の限りを尽くした。女は肺病になつた。而して死んだ」これだけの事実を中村白葉氏が材料として持つて居られた。私がそれを懇願したら譲つて下さつた。この創作は以上の材料から構出されたものだ。[9]

だが有島は、中村白葉から聞いた実話を基にしながら別の

物語を創った。不貞を犯した女は本能を抑えられず結婚後も引き続きその相手と不倫を犯すだけではなく、情念のために美少年と密会を楽しむのである。さらに恋人である加藤から見放されると、Aにそれを求めるという異常なまでに性に執着する「娼婦型の女」に造形している。それゆえこの作品は発表当初、菊池寛から、

△全体として、虚構だと思ふ。が大きな華やかな立派な虚構である。そして、全体が虚構であるに拘はらず部分々々は飽迄、現実的である。そして全体が大きな心理的演習である。人間の心理を解剖し、その真諦を掴んで之を創作台上に置き之を駆使して、心ゆくばかりの心理的演習を行はしめた作品である。[10]

と絶賛されるなど、文壇の注目を集められたが、ここではひとまずあらすじを見ておこう。

二十歳の大学生であったAは、友人の加藤と招かれたB先生ひきつけられていった。やがて二人は結婚の約束を交わすまで懇意になったが、社会的地位、財産に乏しかったAは、M子の親の意見で洋行し、商売のやり方などを懸命に働き学ぶことを結婚承諾の条件とされた。外遊の三年間Aは死にもの狂いで努力し、実業家としての素養を身につけた。その間、M子から送られてくる手紙はAを励ました。しかし、Aがアメリカで暮らしはじめて二年になる頃、突然M子からの消息が途切れた。不安に駆られたAは誰にも知らせず、三年ぶりに帰国した。Aの疑いの通り、M子は大学時代の知り合いであった加藤と親しく交際を重ねていたのである。三人で話し合った末、加藤はM子と別れることを誓った。その一ケ月後、AとM子は結婚式を挙げた。M子は生まれ変わったかのように慎ましい主婦になった。そして、Aは海外での実務を生かして一年足らずで事業を成功させた。AはM子に対して徐々に警戒心を緩め、二人の愛を確信するようになった。しかし、加藤の字を思わせる紙切れを拾ったAは、M子の裏切りに衝撃を受ける。以来、AはM子の密会の現場を探らせるために私設探偵を雇うなど、あらゆる手段を講じて彼女への復讐の念を募らせた。Aの罠にはまったM子は再び加藤と密会を重ねるにとどまらず、情欲から美少年と遊ぶようになり、そのことが原因で加藤との関係も悪化する。そのことを

ひそかに見ているAは「嫉妬のorgasm」のような快楽を覚える。追い詰められたM子はどんどんヒステリックになっていった。しかし、Aは復讐の手を緩めるどころか、むしろ彼女への精神的攻撃を強め、性の飢餓状態に陥ったM子は強度のヒステリーに陥って発狂してしまう。復讐のためにすべてを失ったAは復讐に至った経緯を認めた手紙とともにもぬけの殻になったM子を加藤に送り、二人の前から姿を消した。[11]

以上が「石にひしがれた雑草」のあらすじであるが、有島はM子のみならず、Aの異常さをも描いている。「あの女が誰にも独占されるのでなければ、俺れも別に独占する気はない」（四七一頁）と、M子に出会ってすぐ異常なまでの執着心に駆られるAは、M子と同様に本能のままに生きる人物として描かれている。有島自身も恋愛と結婚が親の反対によって挫折し、厳格なキリスト教的倫理の中で本能を押さえて生きてきた人生であったことを考えると、「石にひしがれた雑草」に描かれている「M子」と「A」の異常な行動は、有島自身の内面世界を表していたものではないかと思われるが、この作品に深く共鳴し、その影響を強く受けていたのがほかならぬ韓国からの留学生たちであった。

その二、「除夜」とそのあらすじ

一九一〇年代から二〇年代にかけて日本に留学していた学生たちは、まさにモダン都市へと生まれ変わろうとしている東京を目の当たりにした。街にはデパートやカフェ、おしゃれなビルが建ち並び、断髪と洋装のモダンガールとモダンボーイが闊歩していた。このモガ、モボたちは誰にも憚ることなくカフェやダンス・ホールに遊び、大衆都市文化の花開く東京をリードしていた。留学生達は、モダンでおしゃれで猥雑で危険で、そしてミステリアスな東京という大都会に戸惑いながらも、その自由な雰囲気に引き込まれていった。とりわけ、留学生達を強く惹きつけたのは若い男女の自由な交際と恋愛、そして女性の社交の自由であった。親の決めた結婚の形しか知らなかった留学生達は、この新しい習俗に違和感を覚えつつも、自分の意思で配偶者を選択するという斬新な行為に魅力を感じずにはいられなかった。すでに一部の留学生の間では親睦会や講習会、講演会などを通じて恋愛関係に陥る者もいた。

ところが、彼らの前には早婚という現実の壁が立ちはだかっていた。当時朝鮮の中流、上流階級の家庭では息子が十

代半ばになると、年上の女性と結婚させて早目に跡継ぎをもうける習慣があり、当然男子学生のほとんどは故郷に妻子をもつ既婚者であった。それに対して女子学生はほとんど未婚であった。それゆえ彼女たちは自分に見合う恋愛相手や結婚相手を既婚者の中から選ぶしかなかった。新女性の中に妾や後妻になった者が多い[12]のは、彼女たちにとって伝統的な結婚制度の壁が如何に高かったかを意味する。このような矛盾に満ちた現実を乗り越えようとする女性たちもいた。しかし、その代価はあまりにも大きかった。朝鮮最初のソプラノ歌手として知られる尹心悳が妻子のいる男と無理心中を図ったのはよく知られた事実である。

尹心悳は、東京音楽学校に在学中の一九二一年に在日朝鮮人留学生親睦会を通じて知り合った早稲田大学生、金祐鎮と恋に落ちた。しかし、大富豪の長男であった金裕鎮は当時の習慣に従ってすでに結婚していた。だから二人の恋は社会的に許されない、いわゆる不倫なのであった。二人は愛情と倫理の間で苦しんだが、結局因習の壁を越えられず、一九二六年八月四日、玄界灘に身を投げた[14]。ジャーナリズムは競ってこの心中事件を報道し、高等教育を受けた女性の恋愛と結婚

玄海灘激浪中에
青年男女의情死
—극작가와음악가가한떨기꽃이되야—
세상시비저두고상연든몸나라로—
男子는金祐鎮女子는尹心悳
尹心悳의來歷
尹孃은音樂家
金氏는劇作家
單身으로洗世界尹孃來歷과
百萬長者金氏의最近
絶島風情
◇對馬島訪問◇
(三)
深
同
水

【図1. 尹心悳と金宇鎮の玄界灘心中事件を報道した『東亜日報』[13]】

問題が社会的に注目された。

一九二〇年代当時、女子の普通学校就学率はまだ十％にも達していなかったという教育事情を考慮すると、尹心悳のように高等教育を受けた女性は非常に恵まれた、かつ貴重な存在なのである。本来ならば、彼女たちは留学などを通じて学んだ知識を社会に広める重要な役割を担っていたはずである。しかし、知識など因習的な結婚制度の前では邪魔もの以外の何物でもなかった。

このような現実に強い不満をもつ知識人達は、自由な男女交際と結婚の実践こそが朝鮮社会を封建的因習から救い出すことだと思い、自由恋愛を近代化のための重要なテーマとして取り上げるようになったのである。[15] 一九二二年に発表された廉想渉の「除夜」は、自由恋愛を渇望する新女性たちが、現実の壁にぶつかって挫折する様子を描いて文壇の注目を集めた作品である。廉想渉は、置手紙という形式を借りて、女性にのみ貞操を求める現実を告発することによって、当時批判の対象となっていた新女性の生き方に理解を示したが、この作品には留学時代に愛読していた有島武郎の「石にひしがれた雑草」が深い影響を及ぼしている。まず、あらすじから見て行く。

六年間の日本留学を終えて帰国したばかりの崔貞仁は、母校で教鞭を取る一方、講演会で女性問題について講演するなど、忙しい日々を送っていた。そんな彼女に結婚の話が持ち上がった。貞仁に結婚を申し込んだのは東京高等商業学校出身の堅実なA（安氏）である。一度結婚に失敗したAには貞仁を後妻にしたい事情があった。それは彼女に若干の名声と知識があったことと、妾の子であること、また二十五歳という初婚には難しい年齢であるということだった。Aは彼女に結婚を申し込んだのだが、彼女は愛なき因習的な結婚には懐疑的であった。貞仁は、XX女学校を卒業した十八歳のときにはもう処女ではなかった。彼女は一人の男性とだけでなく、さまざまな男性との恋愛を謳歌したい自由恋愛論者であったが、留学生活はまさしくそれを果たすことができた。そこで彼女はPという男性に出会った。またEという男性に出会ったのは帰国後それほど日が経っていない頃だった。貞仁を中心にした女子講演会があった日、彼女はPからEを紹介された。貞仁はEを見た瞬間心が魅かれた。彼女はPが日本に戻るや否やEを誘惑し始めた。それからまもなく彼女はEと関

係を結んだ。しかし、貞仁はそれに満足せず、Eを離婚させようとした。Eが自分と結婚してドイツ留学に連れて行くことを狙うようになった。その間もAとの結婚話は父親を中心に着実に進められていった。その後貞仁は教師を辞め、結婚を延期してほしいと両親に頼んだが、父親の猛反対に遭い、家出をしてしまう。釜山に逃げた彼女は、すぐEに電報を打ち、Eも釜山にやってきた。しかし、Eはドイツ留学に貞仁を同伴する気持ちはもはや薄れていた。家に戻った貞仁は、妹に頼んでEに手紙を出すのだが、Eはすでに心変わりをしたので冷たい返事しか返って来なかった。まもなく妊娠していることに気づいた貞仁は、Eに妾でもいいからドイツ留学に同伴しくれるようにと、手紙を出すのだが、Eの態度はあくまでも冷淡だった。貞仁とAとの結婚式が近付いていたが、妊娠ももはや隠せない事実になっていた。貞仁はAが自分を許してくれることだけを祈った。その後、貞仁とAは東京で三週間の新婚旅行を終えて大邱に新居を構えた。新婚旅行の途中、Aが見せる愛情に心を動かされ、貞仁は生れて初めて後悔というものをした。だが、偽善の上で始まったこの結婚は七十五日でピリオドが打たれた。妊娠が発覚し、また新婚旅行でもずっとAとの関係を拒み続けたことでAの疑いがますます深くなったからである。だが、彼女には逃げ道があった。新婚旅行の際、逢ったPと話がついていたのである。P自身も故郷にいる妻との離婚をずっとねがっていたのである。そして、ついに貞仁はAから見捨てられるのである。ソウルに戻ってきた彼女は親を説得して独り暮らしをはじめる。Aが再婚するという噂は彼女を絶望させた。その後四カ月近く貞仁は悩み続けていたが、クリスマスイブにすべてを許し、新しく生まれる命も受け入れるというAの手紙が届いた。Aの手紙に衝撃を受けた貞仁は自分の生き方が間違っていたことを悟った。大晦日の夜、A宛てに自分のこれまでの生活を告白する手紙を書き残した後、貞仁はスカートのひもで首をくくるのであった。[16]

以上のあらすじからも窺えるように、「除夜」はその筋立てにおいて明らかに「石にひしがれた雑草」の影響を受けている。つまり、性的に自由奔放な貞仁＝M子、その女性のために苦しめられる羽目になる夫のA＝A、そして貞仁とM子をめぐる男、E＝加藤といった構図は偶然の一致とは思えないほど類似している。そこでここではとりわけ次の三つの点

に注目し、両者の影響関係を明らかにする。

その三、「石にひしがれた雑草」から「除夜」へ

第一に、叙述形式の類似が指摘できる。あらすじからも分かるように、「石にひしがれた雑草」は不貞を働いた妻に復讐を果たした夫が自殺する前に、妻の不倫相手の男に復讐の顛末を一通の手紙で告白するという書簡体小説である。一方「除夜」は、他の男の子をみごもったまま結婚した女がすべてを許すという夫に死を以て詫びる前に、不貞に至った経緯と原因を一通の手紙で赤裸々に告白するという書簡体小説である。つまり、両作品ともに自殺を決意した主人公が過去を振りかえり、今の自分の心境を一通の手紙で書き表す書簡体小説である。しかも双方とも、復讐や不貞に至った顛末を描くに際して他者の意見や立場を全く考慮せず、あくまでも告白を一方的に送りつける「一方送信型」を使っている。小坂晋は、「石にひしがれた雑草」がこのような形式をとった理由を、「主人公の内面を描くために最も適した手法である。作者は（中略）主人公Aの内面を描くためにこの形式を選んだ」[17]と指摘している。確かに、「石にひしがれた雑草」には妻に不貞を働かれた一人の男が妻に執着するあまり嫉妬心を抑えきれず、あらゆる手段を使って彼女を窮地に追いこむ苦悩や葛藤が一方的に吐露されている。それに対して廉想渉は不貞を働いた女を主人公と設定し、彼女を告白者に据えている。「石にひしがれた雑草」のAは、「除夜」の中では脇役に回され、結婚に至るまでの心境は貞仁という女によって説明されている。つまり、貞仁の内面に焦点が当てられているのである。ここに廉想渉の意図が読みとれる。その意図とは、貞仁がなぜ不貞を働いたのか、その内面世界を描くことによって、一九二〇年代の韓国における新女性の恋愛至上主義の顛末を表現しようとしたのである。そのため男ではなく、女を語り手として選んだのである。この点については次節で詳しく述べることにする。

第二は、作品の構成の一致と、細部における事柄の類似性が指摘できる。ここでは両作品を導入部、発端部、展開部、上昇部、結末部と五つの段階に分けて考察する。

まず導入部だが、両作品とも物語は、それぞれの主人公が手紙を書き残す理由を述べるところから始まっている。「石にひしがれた雑草」は次のような書き出しで始まる。

姿を隠すときが来た。何を愚図々々のさばっているのだと心の中で君に苛まれる時も果てた。君と一緒にこの地球の上にいながら姿を隠すのか、あるいはあの世に姿を隠すのか、そんな事は詮議してくれるな。縦令詮議した所で無駄だ、僕が姿を隠した後に、君はこの置手紙一つ以外の外は何物も見出さないだろうから。（中略）

姿を隠す前に、僕は君の恋人であり、僕の妻であるM子を生殺しにした顛末を君にだけ知らせて置きたいと思ふのだ。僕が何か目的があつてそんな事をしたと思つてはいけない、僕には目的はない。目的なぞがあるものか。（中略）僕は唯何だか君に書き残したい。[18]

これに対して「除夜」は次のように始まっている。

最後の瞬間は一番重大な使命を遂行します。そして絶対的な終結を告げます。その結果、残るものは何でしょう。ただの空っぽです。空から空へ流れてそこに永遠な安住があり、絶対的な解脱があり、純然があり、神聖があり、至る善があるかと思います。

しかし、いまこの手紙は何の必要で書くのか、自分も疑問であります。最後の結末と何の関係があってこの手紙を書く気になったのか、自分もよく分かりません。（中略）この手紙を口実にあなたの同情を買おうとするとか、もしくは私があなたの心情を理解し同情しているという良心の片影を見せるためでもありません。（中略）第一に私にはあまりにも苛酷な刑罰です。[19]（拙訳）

「最後の瞬間」という言葉ではじまる冒頭から自殺をほのめかす口調、手紙を書く理由の提示、手紙を書かずにはいられない主人公の心境、目的のないまま自分の過去の顛末を告白しようとする心情など、「除夜」の冒頭が「石にひしがれた雑草」を手がかりに書かれていることは明らかである。

次の発端部では、両作品ともM子とA、また貞仁とAがどのようにして出会い、結婚に向かっていったのかが描かれている。

展開部では、「石にひしがれた雑草」の場合、Aがアメリカ留学へと旅立った後、M子の新たな恋人である加藤の出現

と、Aの帰国による二人の破局が描かれる。これは「除夜」では、貞仁とEの新しい出会いと、二人の深い関係が、Eが既婚者である現実の壁にぶつかり破局する内容にとってかわっている。

上昇部では、M子が結婚した後も不貞を犯し、Aがその復讐を決意する。その結果、M子はヒステリーに陥り、発狂するのである。この部分は「除夜」では貞仁が他の男の子供を身ごもったままAとの結婚を強行したことが明るみになり、Aは苦しんだあげく貞仁を実家へ帰すことにする。つまり、両作品とも結婚に終止符が打たれる原因が、女性側の不貞である点が一致していると言える。

そして結末部では、両作品ともそれぞれ「凡てが終わった」(「石にひしがれた雑草」五二八頁)、「最後の微かな音さえも切る時がすぐそこまで来ました」(「除夜」一〇八頁)と告げ、自殺へと向かう様子が描かれている。

このように、両作品を五段階に分けて比較考察すると、「除夜」が「石にひしがれた雑草」の構成の影響を受けていることは明らかである。

第三は、女性の描き方の類似が指摘できる。つまり、「娼婦型の女」として描かれるM子の性質は、そのまま「淫蕩な気質で娼婦的な不倫を犯した」貞仁の性質に置きかえられている。しかも、この「娼婦型の女」の性に対する執着は貞仁の自由奔放な男性遍歴を際立たせる仕掛けとなっている。次の文は貞仁の「娼婦型」の性質がよく表現されている場面である。

「私の前に集まってくる色とりどりの青年たちの群れは、宝石店のショーケースの前に立った婦人よりも、私にとってはもっと輝いて、満足に見えました。(中略)はめたければどれでもはめられるし、はめたくなければ一つも手をつけなくてもよかったのです」(「除夜」七二～七三頁、拙訳)

つまり、「石にひしがれた雑草」のAにとって「娼婦型の女」であったM子の周りを取り囲む男たちの姿を、廉想渉は貞仁から見た男性たちに置き換えて描いているのである。作者は「石にひしがれた雑草」におけるM子の性質をそのまま「除夜」の貞仁に適用していると言えるであろう。

以上、書簡形式とプロットの構成、そして女性の描き方という三つの要素を比較考察してきたが、結論として廉想渉は「除夜」を執筆するに当たって有島武郎の「石にひしがれた雑草」から多くのヒントや示唆を受けていると言える。しかし、ここで注目すべきは、なぜ、廉想渉は男性ではなく、女性を語り手として描いているのか、という点である。その理由を次節で探りたい。

三、もう一人のM子――「良妻賢母」と「娼婦型の女」の間で

「除夜」は、「石にひしがれた雑草」の中でAを苦しめるM子を主人公に据え、その視点から物語が語られている。いったいなぜ廉想渉はA（男性）から貞仁（女性）へと視点を変えたのであろうか。これには近代とともに新たに登場してきた「新女性」の存在が深くかかわっている。

近代化の波に乗って西洋から「自由」「平等」という思想が伝えられたのを契機に、それまでの儒教式教育が見直され、女性も男性と同じく近代的教育を受けるようになった。女子師範学校、官立女学校、ミッションスクールなど各地に女学校が設立され、女学生たちは欧米の新しい知識を意欲的に身につけはじめた。その結果、一八九〇年代頃から男女平等や女性の地位、権利を主張する新しい価値観を持った女性たちが現われた。いわゆる新女性である。

ところが、日清戦争後、大国化を目指した明治政府によって良妻賢母思想が女子教育の中心となってから、女学校ではそれまで行っていた男女平等に基づく近代教育から男性に従って家を守り、育児にいそしむ女としてのしつけを重視する良妻賢母主義に基づく教育に切り替えられ、男女平等への道は急激にふさがれてしまった。[20] 無論、女性たちも黙っておらず、一九一一年、平塚らいてうたちによって結成された「青鞜社」が、機関誌『青鞜』を通じて女を束縛する既成道徳に反旗を翻し、因習の中で出口を模索していた多くの女性の共感を呼んだのは周知の事実である。家族制度批判を始め母性、貞操、堕胎、公娼などあらゆる婦人問題を議論の対象とした『青鞜』の活動[21]は、日本における婦人論興隆の引き金になっただけではなく、韓国や中国の女性解放運動にも大きな影響を及ぼしている。[22] その担い手たちは他でもなく、一九一〇年代から二〇年代にかけて日本に留学した女子留学生たちである。

中でも韓国から来日した女子留学生たちは『青鞜』をはじめとする日本の女性運動に刺激され、留学生会の機関誌を通じて女性の自我を主張し、儒教道徳における男尊女卑思想を批判し男女平等論を展開して注目を集めた。帰国後も、封建的価値観から女性を救い出す運動を展開するなど、女性の地位向上のために活動し、社会的に期待された。しかし、そうした運動をしたのはごく一部の女性であって、多くの新女性たちは世間や周囲の期待とは裏腹に仕事に就くこともなく、中には派手な男性遍歴を繰り返す女としてジャーナリズムを賑わす、いわば時代の「トラブルメーカー」とされていた。新聞や雑誌、さらに小説では伝統的なモラルに捉われず自分の意志で生きる新女性を連日のように取り上げ、その生き方を批判したが、とりわけ廉想渉をはじめとする留学帰りの男性作家は新女性の生き方に対して厳しいまなざしを送っていた。

前節で見てきたように、廉想渉の描く「除夜」のヒロインの貞仁は、日本に留学したエリートであるにもかかわらず、帰国後、ろくに仕事もせずひたすら結婚にこだわり、その過程で不倫や姦通、裏切りを繰り返す、いわゆる性的に奔放な女に造型されている。「除夜」だけではない。金東仁の「心の浅き者よ」（一九一九）「弱き者の悲しみ」（一九一九）、田榮澤の「運命」（一九二〇）、李光洙の『再生』（一九二五）に描かれたヒロインたちも、社会をリードすべき立場にいながら、仕事よりも恋愛や結婚にしか関心を示さない人物として描かれているのである。確かに、新女性たちは仕事よりも、結婚にこだわっていた。

【図2. 就職できず卒業証書の前で泣く女学生[23]】

しかし、彼女たちは始めから結婚にこだわっていたのではない。女学校を卒業しても、その知識を生かす職場もなく、[24]

女性を家庭に押し込めようとする当時の社会的風潮がそうさせたのである。廉想渉たちもそうした事情をよく知っていた。だからこそ、当時の韓国社会が求めていた理想的な女性像、すなわち対等なパートナーとして家庭を築き、子供の教育に努める良妻賢母とは正反対の女性像を通して、結婚以外に選択肢のない新女性の置かれた現状を浮き彫りにしたのであるが、その際、彼らがモデルにしていたのがほかならぬ有島の描き上げたヒロインたちである。

『或る女』の葉子、「石にひしがれた雑草」のM子、「宣言」のY子は、いずれも女学校を出たエリートでありながら、職に就くこともなく、仕事をしようともしない。だからといって、男に従って家を守り、育児にいそしむ良妻賢母でもない。彼女たちはただひたすら恋愛を楽しみ、愛に忠実に生きるが故に不貞を働き、男を苦しめる人物として描かれている。注目すべきは「石にひしがれた雑草」のM子である。彼女は「先天的な娼婦型」の性質で二度も夫を裏切って愛人の加藤のもとに走るが、その娼婦性とは「童貞に惹かれ、他の女に与えるのを妬み征服しようとするエリス説[25]」に支えられているのである[26]。

ところが、このような娼婦型のM子の心理、すなわち有島武郎が描こうとした女性の性に対する欲望は、貞仁の「娼婦型」の中から探ることはできない。なぜなら、廉想渉が描く貞仁の「娼婦」性は遺伝によるものであるからだ。

今になって大胆、無礼に父母の欠点を暴露して不肖の罪を繰り返そうとするのではないけれど、私の生命が、その発芽の第一歩を不倫の結合から出発したことは（中略）疑いのない事実です。口にするだけでも恥ずかしいですが、私の祖父は言うまでもなく、父親の絶倫な精力は祖父の子供であることをもっとも正確に証明します。60歳近い今でも、妾が二人もいます。その中では自分の孫といってもおかしくない幼い女学生上がりまでいるそうです。しかし、私の母も決して貞淑な婦人ではなかったです。（中略）ともかく、私が彼らの娘である事実を忘れてはなりません。（中略）嗚呼、私は私生児です。（中略）私は姦夫姦婦が作り出した醜い肉の塊というわけです。（中略）小さい時から見慣れた濃厚な色彩は私の感情を体質以上に早熟にさせました。もう一度言うと、家

庭の空気がまさしく私の雰囲気であったことを看過してはなりません。（中略）いまいましい崔家の血！ああ！（「除夜」六八～六九頁、拙訳）

この遺伝による「娼婦型」は「悪い血」と表現され、当時「自由恋愛」を主張し、実践した理由として、他の作品でも取り上げられていたのである。[27] この「悪い血」について崔ヘシルは次のように指摘している。

妾との間にもうけた私生児が社会的に認められない事実を、貞淑ではない女性の子孫は悪い血を受け継いで生まれたので、生来貞淑な家庭の主婦にはなれないという迷信と結びつけている。[28]（拙訳）

つまり、貞仁の生涯こそ結婚家族制度という社会制度を守るために「性」がどのように管理され、規定されたのかを克明に表した身体の政治学（body politics）[29] の具現であった。それだけではなく、堕落したヒロインが結局、死の運命を免れ得ないという伝統的な文学テキストの叙事構造に従っている点も注目に値する。そのために「石にひしがれた雑草」のM子がヒステリーに追い込まれる場面での有島武郎の女性の性に対する心理描写は貞仁には見出すことができないのである。

廉想渉は、最後に貞仁の過ちを許すという寛大な夫を設定し、貞仁は不貞な妻のまま、その償いの道として身ごもったまま自殺を選ばせている。そして、これで「二つの生命は救われました」（一一〇頁）と言い放っているのである。ここでは少なからず作家自身の主観、つまり社会の中心である男性たちの、女性は純潔でなければならないというエゴイズムが窺える。貞仁は、社会、つまり男性のエゴイズムによって殺されたのではないだろうか。作者は「除夜」の中で家父長制を批判してはいるが、貞仁が自ら死を選ぶというプロットは、結局、その家父長制をより堅固なものにしているに過ぎない。その意味において廉想渉も結局のところ、時代の制約から自由ではなかったと言えよう。

しかし、廉想渉が有島武郎の造型したM子を通し、近代化の真只中で、韓国社会に現われた新女性の姿を見出そうとした点は意味深い。つまり、日本留学出身といったインテリ女

性が、一夫一婦や女性の権利を主張しつつ、自分は「文明化された女性にふさわしい」ドイツやアメリカ留学のために不倫をし、さらに結婚をしようとするのである。「自由恋愛」という新しい観念を自分に都合よく解釈しようとした価値観の混乱は、その末路が見えるものであった。そのため貞仁にとってのAは性的対象としてではなく、貞仁の両親を目覚めさせる相手なのである。それは、「石にひしがれた雑草」のM子がヒステリーの果てに自殺を図ろうとしたこととは異なり、貞仁は自分の自由奔放な恋愛観の末路として自殺を選んでいるからである。貞仁の後悔は、新女性たちが履き違えた恋愛の自由という意味を裏に含んでいる。もしかしたら貞仁の口から後悔が語られることによって、より新女性の行動に真正性を与えようとしたのではないだろうか。ここに貞仁を主人公に据えた意味が窺えるのである。「除夜」という題目が示す通り、貞仁は夫の許しの手紙を見て、

私は泣きました（中略）一生を通じてたった一回、可愛い涙を流しました。（中略）私の涙は……新たな生命の泉でした。私は生きます。永遠に生きます。あなたの胸の中に包まれて永遠に生きます。ああ！（「除夜」一〇九頁、拙訳）

と叫ぶのである。つまり、彼女は夫の許しによって少女の心を取り戻し、また自殺することによって夜の世界は幕を閉じ、Aの愛という新たな「光」の世界へと出発するのである。しかし、このような「除夜」の構造は、娼婦が死を通して処女に戻れるという歪な結末と、ヒロインに純潔だけを求める社会の中心、すなわち男性たちの利己主義を露呈していると言わざるを得ない。

四、自由恋愛の行方

「新女性」という言葉が封建的、つまり儒教的な価値観を打ち破る女性につけられた言葉であっただけに、未だ伝統的な思想から抜け出すことのできないほとんどの人々にとって彼女たちは芳しくない存在であった。このような社会的風潮を代弁するかのごとく、「除夜」のヒロインである貞仁はまさにそのような新女性である。彼女は日本留学をした当時としては

数少ないエリート女性である。帰国した後も女性界の先頭に立つ人物として講演会をしたり、教師として働いたりする職業女性であり、また進んだ女性である。そのような彼女にとって「自我」の省察は自分の生きざまを規定することであった。

一体、生というのは何だろうか？（中略）運命？それも疑わしい不正確な観念に過ぎない言葉ですが（中略）すると、死は何だろうか？シャボン玉のように瞬間的な消滅の名ですか？感情というのは何ですか？恋愛とは何ですか？生殖とは何ですか？神とは何ですか？道徳というのは何ですか？（中略）――すべてが幼い子供が作った玩具に過ぎない。そこに何の権威があって意味があるだろうか。主観は絶対である。自己の主観のみが唯一の標準ではないだろうか。自分の主観が許すなら、それまでの話だ。社会が何と言おうと、道徳が何と言おうと、神が警鐘を鳴らそうと、耳を傾ける必要はないのだ。（「除夜」六一頁、拙訳）

このように、貞仁は既存の道徳や社会の習わしを否定すると同時に、その反動で自我、すなわち自分の思想、個性を主張している。そして、自由恋愛は彼女の存在、あるいは個性を表せる行動であり、また外に向かっての自己表出でもあった。

どんな社会がどんな新道徳を作ろうと、あなたは到底許さないだろう――と、考えるときは絶望に泣き叫びながら神の救いを哀願しました。そして、自己嫌悪が極に達して自分の体が醜悪の象徴のように見えました。（中略）――一体石を投げつけられる者は誰でしょう？何が罪だろう。堕落？それは自由恋愛を渇望する幼い乙女にのみ、被せる絞首台の上に立つ死刑囚の覆面巾の名なのか？（中略）少なくとも私は人間性の第一の美しい部分だけは売らなかった自信があります。（「除夜」六二頁、拙訳）

性とは何だろうという疑問の一環として彼女は、愛と性に対する考察をし、真の自我のための社会的な偏見からの解放を叫んでいる。愛のない結婚という桎梏から脱し、不倫をしてでも自分の正当性を次のように主張しているのである。[30]

Aとの情交が続く時には、Aに対して貞操を守る情夫になるでしょうし、Bと夫婦関係を持続する間は、またBに対して貞淑な妻になればいいのではないでしょうか。Aに対してもはや少しも愛着を感じないならAとの夫婦関係を持続することこそ、かえって姦淫です。(「除夜」七五頁、拙訳)

貞仁にとって男女間の恋愛は愛に支えられている。がしかし、相手は必ずしも一人とは限らない。ここで言う恋愛は、霊と肉を同格にしたものである。貞仁のこのような恋愛観は愛より情念が先走った時、崩れて行くのである。PとEとの関係がそうであり、Eから見放された時、虚栄心のあまり、Aとの結婚を決心することによるものである。その虚栄心は「新女性」として留学することだった。ここで彼女の自由恋愛に対する誤解が生じていると考えられる。口では愛に基づく霊と肉を同格した恋愛と言いつつも、自分の虚栄心を満たすためにEとの恋愛を利用しようとしているのである。

Eの学職、名声、風采が気に入らないということではないです。離婚が成立するように願わないということでもないです。しかし何より逃してはならないことは、ドイツ留学の計画でした。もしもドイツまで行けなくても、とにかく洋行さえすればよかったです。学問も学問ですが、日本に行くだけでは、到底私の虚栄心が満たされなかったからです。(「除夜」八二頁、拙訳)

そして、それがうまく行かなくなった時、Aとの結婚を受け入れるのである。貞仁のこのような大胆な行動は、彼女一人に限られた問題ではかった。この作品の中でも貞仁のような新女性に対する批判があちらこちらに見られる。

Yのような女は結婚した後まで、夫が留学する間に、それも教師勤め、〇〇勤めをやたらにしたせいで、それこそ山のようなお腹を抱えても、夫が許してあげたので、今も相変わらず皆を騙して先生と呼ばれているし……それだけではない!呆れたことに、Sは〇〇を始末して前もって妊娠する心配もなくしてから、ありとあらゆるふ

るまいをしていても、講演会という講演会には抜けることなく、新聞に毎日騒がれても有志淑女としてもてはやされているではないか……「除夜」一〇七頁、拙訳）

このように新女性の「恋愛」は自由を放縦と誤解するのと同じように、「恋愛」こそ真の女性解放であり、伝統思想からの脱皮として捉えられたのである。それは封建思想の中で抑圧されてきた女権の回復に向けての道のりであり、その先頭に立ったエリート女性の環境も看過してはならない。つまり、この作品では貞仁の思想の底流にある家庭環境の問題が取り上げられているが、言い換えれば、当時留学した女性が出会った男性の持つ「恋愛」対象者としての弱点があった。つまり、早婚という因習に縛られていた時代なので、彼女たちが求める男性は既婚者であった。従って、彼女たちの選択条件は既に制限されたものであった。それは「新女性」たちが打開することのできない厚い壁だったのである。そこで彼女たちが叫ぶ「自由恋愛」はプラトニック・ラブを越えた霊と肉を同格にする新たな恋愛観、つまり「恋愛至上主義」に向かうのである。親や地域社会の目が届かない留学という環境が浅薄な「恋愛観」を生むのである。浅薄という表現を使う理由は、この作品でも扱われている貞仁のような新女性の虚栄と社会道徳の基準を越えた多くの男性との肉体関係は決して尊い恋愛に結びつかないからである。つまり、貞仁が自殺を選んだ理由は、封建社会の規範に押しつぶされる女性の「愛」ではなく、自分自身の自由への錯覚による後悔であったと言えるだろう。

五、おわりに

韓国に「恋愛」をもたらしたのは日本であった。次の文は一九二〇年、雑誌『ソウル』に掲載された恋愛に対する当時の論評である。

今、私たちの社会は段々恋愛化されようとしている。恋愛の中でも俗恋愛である。この俗恋愛化されようとする今の社会状態は大変、恐ろしい現象である。この恋愛は西洋から日本に入り、日本から我国に入ってきた。[31]（拙訳）

小説は、その作家が生きた時代と社会を如実に記録するという反映論の観点から、「恋愛」もまたそのような視点で見ることが出来るであろう。「除夜」をその脈略から考えると、「恋愛至上主義」が韓国社会に与えた影響は大きい。それは女性に一途な従順から「主観の絶対さ」を認識させ、さらに家から社会へ、そして社会において主体となる可能性を示唆したのである。

しかしながら、有島武郎の「石にひしがれた雑草」は社会反映論とは無縁な、あくまでも作者の内面世界を表現した作品である。つまり、有島武郎が求めてやまなかった霊と肉の一元的な満足、すなわち「一元的な個性[32]」は、人間が本能的に欲するものである。その中でM子が求める「肉」の本能は、「霊」が排除された人間の歪んだ心理状態を露呈したものであろう。

一方、「除夜」は有島武郎の観念的な世界に立ち入るものではなく、「恋愛至上主義」という観念的な世界をより「実体化」させようとした作品である。その「実体化」は、M子と彼女の自由奔放な性質をかたどった貞仁であっと言えるのではないだろうか。

注

（1）本論文は、二〇一二年度（平成二十四年度）科学研究費補助金（基盤研究C）「有島武郎と外国文学―韓国近代文学を手がかりとして」（課題番号22520346）の成果の一部である。

（2）柳父章『翻訳語成立事情』（岩波書店、二〇〇一年）八九～一〇五頁参照。

（3）柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社、一九八〇年）九五頁。

（4）佐伯順子『「色」と「恋」の比較文学史』（岩波書店、二〇〇〇年）十六頁によれば、「神の愛と隣人愛を併置するキリスト教的な「愛」の思想に基づけば、単に「愛」といっただけでは、人間と神、あるいは親子、兄弟姉妹、友人といった広範囲な関係が含まれるので、特に異性間の好意に特定したい場合には、従来の日本語の「恋」という語と、翻訳語としての「愛」とを合体させて、「恋愛」という表現を使用するようになった」と指摘している。

（5）李光洙「幼き友へ」（『青春』九号、一九一七年十二月）。

（6）廉想渉が有島武郎の作品を深く読んでいるばかりでな

く、その影響を強く受けていたことは、金允植『廉想渉研究』（ソウル大学校出版部、一九八七年）を皮切りに、姜仁淑『自然主義文学論Ⅱ』（高麗苑、一九九一）、李甫永『乱世の文学』（図書出版芸知閣、一九九一）などによってよく指摘されている。

（7）金允植、前掲書（註6）一八七頁。

（8）金充植、前掲書（註6）一七三～一八八頁。

（9）山田昭夫「解題」（『有島武郎全集第三巻』筑摩書房、一九八〇）六八九頁。

（10）菊池寛「四月の文壇に就いての雑感」（『帝国文学』一九一九年五月）。

（11）『有島武郎全集第三巻』（筑摩書房、一九八〇年）、ただし初出は『太陽』第二十四巻四号（博文館、一九一八年四月）。

（12）一九二〇年代当時、高学歴の女性の結婚は非常に厳しく、教育の上でも価値観の上でも自分に見合う男性と結婚するためには、妾になるか、後妻になるか、それとも結婚せず独身を通すかの三つの選択しかなかった。

（13）『東亜日報』一九二六年八月五日二面。

（14）ユ・ミンヨン『尹心悳　死の賛美―尹心悳評伝』（ミンソン社、一九八七）と『金裕鎮全集Ⅰ・Ⅱ』（チョンイェウォン、一九八三）参照。

（15）崔柄宇「韓国近代一人称小説研究」（『一九九二年度ソウル大学大学院博士論文』）一二二頁～三頁。

（16）『廉想渉全集第九巻』（民音社、一九八七）。ただし初出は『開闢』（開闢社、ソウル、一九二二年二月～六月に渡って五回掲載）。

（17）小坂晋『有島武郎文学の心理的考察』（桜風社、一九七九）一八〇頁。

（18）有島武郎「石にひしがれた雑草」（『有島武郎全集第三巻』筑摩書房、一九八〇）四六七頁。以下頁数のみ記載。

（19）廉想渉「除夜」（『廉想渉全集』民音社、一九八七年）五九頁。以下頁数のみ記載。

（20）牟田和恵「新しい女・モガ・良妻賢母―近代日本の女性像のコンフィギュレーション」（『モダンガールと植民地的近代―東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店、二〇一〇年）参照。

（21）米田佐代子・石崎昇子「『青鞜』以後の新しい女たち―平塚らいてうと「産婦人協会」の運動を中心に」（『新女性―韓

国と日本の近代の女性像』青年社、二〇〇三）参照。

（22）ムン・オクピョウ「朝鮮と日本の新女性―羅蕙錫と平塚らいてうの生涯の比較」（ムン・オクピョウ編『新女性―韓国と日本の近代女性像』青年社、二〇〇三）参照。

（23）三山人「女学校に通うと結婚ができなくなる」（『別乾坤』一九二八年二月）一〇四頁。

（24）本格的な女性雑誌として知られる『新女性』（一九二三年九月から一九三四年四月）は、一九二六年二月号で「婦人職業問題」という特集を組み、女学校を卒業しても「行くところがありません」、「金のない境遇」、「一人で生活が出きるようになれば」、「嫁に行けといわんばかりの親」と訴える女学生の投稿を紹介している。また、京城（現ソウル）にある進明女学校の一九二四年度卒業生四八五名のうち、職に就いた女学生は、学校教員四七名、外国留学十四名、銀行会社事務二名に過ぎず、その他の卒業生は家事手伝いであるという事実を紹介している。

（25）小坂晋、前掲書（註17）一六六頁。

（26）有島は、一九一六年三月二八日、H・エリスの『性心理学の研究』を読み終えた後、日記に「多くの知識と示唆を与えられた。性生活における女性の心理や、ヒステリーと性本能との間の関係など、いくつかの事実を学んだ。これはうまく扱えば稀に見る文学作品に仕上がるだろう。『或る女のグリンプス』を書き換えるのに有用な点が数々得られた。」と記している。「観想録」第十五巻〔訳〕」（『有島武郎全集第十二巻』四五九頁。

（27）金東仁の『金妍実伝』（一九三九）の中でも性的に放縦な父と妾の母との間に生まれた主人公が、その悪い環境のゆえに貞操観念が薄いとされている。

（28）崔ヘシル『新女性たちは何を夢見たのだろうか』（考と木、二〇〇〇年）三三七頁。

（29）崔ヘシル、前掲書（註28）三六七頁。

（30）鄭明煥「廉想渉とゾラ―性に関する見解を中心に」（権ヨンミン編『廉想渉文学研究―廉想渉全集別巻』民音社、一九八七年）三二五頁。

（31）林蚩出「俗恋愛は反対」（『ソウル』一九二〇年四月号）但し、金ジンソン『現代性の形成―ソウルにダンス・ホールを許せよ』（現実文化研究。二〇〇三年、二九〇頁）に収録。

（32）安川定男『有島武郎論』（明治書院、一九六七年）七八頁。